





ホムラ達と最後に会ってはや3日。

あの男はあれ以来ばったり現れなくなり、

私はこの牢獄に拘留されたまま何も起こる事なく放置されている。

「んっ…はぁ…なんで…」





そう、放置だ。身体や頭をあれだけ弄り回し、

このような服とも言えない拘束具を無理やり着せ、

その上で凌辱の限りを尽くした状態で、

今は何もされず食事だけを与えられている。



耐えられたのはたった一日。身体中の火照りは逃げ場を失い、眠れない程の乾きが私を苛んだ。

三日。それだけで私は思い知らされた。

この身体は以前のモノとは違つたという事を。

股間は絶えず疼き、重すぎる程熱れたこの胸はジンジンと痛い程熱を帯びている。

気がつけば、一心不乱に自慰行為に耽るようになっていた。



「なんで……何もしないなら……」





わかってている。きっとあの男は監視カメラ越しに私の
無様な姿を覗いているのだろう。
それでも、私は我慢出来なかった。



(……足りない。指なんかじゃ全然気持ちいい所まで届かない……
胸だって、こんなのじゃ全然満足できない……)



自分が知らないはずの激しく鈍めかしい指使い、
それでも私の情欲は収まるどころかどんとどんと膨れ上がっていく。
その度、脳裏にあらった犯された記憶が脳に掠める



(あいつのだったらら……あいつのチンポだったら……ダメ、これじゃ
思うツボなのに……頭から離れない……私一人じゃイケない)



「大丈夫ですか？ ヒカリちゃん。」

「全然満足出来てないんじゃないみたいですけど」

「ホムラー!?!」



「ずっとお嬢さんみたいにおまんこ弄って、

辛そうだから助けてあげようと思ったんです」

「……よ、余計なお世話よー!」



「あれって……あの時の……」

「そんな事言わないでください。ご主人様も気に病んでいるんです。忙しくて構って上げられてない事を」



「使うかどうかはヒカリちゃんの自由です。

後、もっと気持ちよくなれる魔法の言葉を教えてあげますよ。

それは————って声にだして言うんです」

「……ッ！そんな事絶対言わないわ！」



「どうするかはヒカリちゃんの自由です。
それじゃ、もう少し我慢してくださいね」



ホムラが送ってきたのは、私が以前の調教で使ったものだった。
あの男の形をした dildo。これを使ったらいけない……
でも、これなら、気持ちいい所まで届くかも……



私のおまんこは待ち望んだようにディルドーを根本まで挿えこんだ。
指とは違う圧倒的な存在感。

気がつけば私は狂ったように出し入れしてた。



「はぁ……おまんこ、気持ちいい……これ、この大きさを……
もっと……もっとグチャグチャにして……」

X X X
X X X
X X X
X X X
X X X

X X X
X X X
X X X

X X X

X X X



私のおまんこは待ち望んだようにディルドーを根本まで挿えこんだ。
の指とは違う圧倒的な存在感。

気がつけば私は狂ったように出し入れしてた。

端を発したように口から卑猥な言葉が溢れ出る。
同時に、今まで躊躇っていた乳首の先に指が挿入る。





(妻い……ズブズブ飲み込んでく。外から触るのと全然違う……
私のおっぱい、本当におまんこになっちゃったんだ)

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

「おまんこ、もっと奥ジュボジュボしてほしいっ！」

「乳まんこだって指なんかじゃなくて、もっと極太のちんぽで貫いてえ」

「でも、まだ足りない。まだイケない……」

「切なくて頭がおかしくなりそう……!!」



淫語を連呼するたびに、少しずつ理性が蕩けていく。
そして、無尽蔵に膨れ上がる性欲のはけ口は、
いとも簡単に最後の夕ガに手をかけた
ホムラが伝えた魔法の言葉。言っではいけない、墮落の言葉……。



「.....、イかせてくださら.....
.....ご主人様.....!.....」



何が起きたのかわからなかった。

足先からかけ登るように電撃が身体を貫いた。目の奥で火花が散り、
今までとは比べ物にならない程の快感が私を襲った。



ホムラの言った言葉を口にしただけ……それだけで私は、
3日間あれだけ何をやっても到達出来なかった快楽の沸点を
いとも簡単に振り切った。

クワッ
クワッ
クワッ

!!!





いや、わかってる。この言葉を口にする意味、

そして言った時の自分の身体の反応。

否定出来る要素など残っていない、私の身体はもう……



「イクッ！イクてるぅっ！止まらないっ！んひらっ！
イクてるのだ、気持ち良すぎてピストンする手、止まらだやんっ！」

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

ズキッ

「気づいちゃったんですね。ヒカリちゃん。」

もう後には戻れない……さあ、全ての準備は整いました、ご主人様。

後はご主人様の手でヒカリちゃんの背中を押すだけです」